

Title	日露戦争の記憶の"敗戦後"史：横須賀・記念艦「三笠」を中心に
Sub Title	
Author	塚田, 修一(Tsukada, Shuichi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2009
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.14 (2009.) ,p.143- 143
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大会報告要旨
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20090000-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

 日露戦争の記憶の“敗戦後”史—横須賀・記念艦「三笠」を中心に—

塚田 修一

本報告は、「日露戦争の記憶」の（アジア太平洋戦争の）“敗戦後”、すなわち 1945 年以降の様相を、歴史社会的に把握することを目的としたものである。

本報告では特に、記念艦「三笠」——日露戦争時、日本海海戦に於いて旗艦として活躍した軍艦であり、1926 年より横須賀に記念艦として保存され、内部には日露戦争にまつわる品々が展示されていた（いる）——を、日露戦争の「記憶の場」（P・ノラ）と捉え、この「三笠」（およびそれを取り巻く横須賀という都市空間）にゆるやかに照準して、「日露戦争の記憶」と社会とが切り結ぶ関係の様相をクロニクルに観察していく。以下、その骨子を記述する。

（アジア太平洋戦争の）戦前・戦中には一種の「戦争博物館」として機能し、大いなる人気を博していた記念艦「三笠」は、1945 年の敗戦と占領に伴い、米軍に接收されることになる。その後には、ダンスホールや水族館へと転々と姿を変え、ついには不良少年少女たちの“桃色遊戯”の場となり、荒廃の一途を辿る。ここに、「日露戦争の記憶」は息の根が止められてしまったかのように見える。

だが、1950 年代後半、小泉信三や伊藤正徳らが中心となり、この「三笠」の復興が進められることになる。また時を同じくして、映画『明治天皇と日露大戦争』（大東映）が突如として大ヒットを記録する。これらの、いわば「日露戦争の記憶」の復活の背景には、未だ疼く“先の戦争の傷跡”——特に横須賀は、何よりも敗戦および占領の傷跡を顕在化させる都市空間であった——が作用していた。すなわち、「悪い現在（現実）」＝“先の戦争の傷跡”に対しての「良い過去」として、「日露戦争の記憶」がノスタルジックに召喚されたのである。

しかしながら、1960 年代に急速に進んだ、“先の戦争の傷跡”の治癒（あるいは忘却）、そして人々の「現在の強い肯定」により、先に見たような「悪い現在」と「良い過去」という関係性は崩壊し、もはや「日露戦争の記憶」には、ノスタルジアやアクチュアリティが見出されなくなってしまう。（事実、1969 年の映画『日本海大海戦』は不振に終わっている。）

こうして 1970 年代には、「三笠」、そして「日露戦争の記憶」は、単なる“カッコいいもの”として、“消費”の対象——いわば「虚構」となってしまうという顛末を辿ることになる。

以上の観察を通して私たちは、「日露戦争の記憶」と戦後日本社会とが取り結んできた関係の諸相を、さらには——大風呂敷を広げた言い方を試みるならば——「日露戦争の記憶」という光源によって照らし出された戦後日本社会の新たな側面をも目撃することが出来た筈である。

今後の課題として残されているのは、現在における「日露戦争の記憶」の状況^{コンステレーション}布置を社会的に把握／記述することであろう。

（つかだ しゅういち 慶應義塾大学大学院社会学研究科）